

# 技術士の目

いわてを見る

## 第1回

### 自然災害に真摯に向き合い、されど悲観せず

小野寺 徳 雄（建設部門、総合技術監理部門）

東日本大震災から8年と5カ月が経とうとしています。今年のお盆も応急仮設住宅で迎えざるを得ない方がおられることに心が痛みます。

この「技術士の目」の連載は、震災前の2010年4月に開始し、震災直後の半年ほどの中断をはさみ、震災から3年後の2014年3月の第150回を区切りとして連載を一旦終了していましたが、今一度、技術士の目で「いわてを見る」こととしました。今回が県内技術士による連載再開の初号となります。

ドイツの哲学者ヘーゲル（1770-1831）は、「人間が歴史を学んで分かることは、人間は歴史から何も学ばないということだけだ」と言っていますが、私は人間の営みは歴史に学ぶことの積み重ねによって進歩・発展を遂げてきたものと思っています。そこで、比較的精度の高い資料が揃っている江戸時代末期以降のわが国の自然災害の歴史を概観し、災害活動期（集中期）に入ったのではないかとと言われるこの時代を生き抜くための備えについて考えてみます。

まず、江戸時代末期からの自然災害を概観してみます。1847（弘化4）年の善光寺地震（M7.3、死者・行方不明者7000~8000人）から1858（安政5）年の飛越地震（M7.1、同426人）までの12年間は自然災害の「極集中期」でした。その後の30年間は比較的平穏な時期が続きましたが、1888（明治21）年の磐梯山噴火・山体崩壊（同477人）から1959（昭和34）年の伊勢湾台風（同5098人）までの72年間は「集中期」が長く続き、特に太平洋戦争中の1943年に発生した鳥取地震（M7.2、同1083人）から伊勢湾台風までの17年間は死者・行方不明者が500人を超える大規模自然災害が16回発生するという「極集中期」でした。それから36年間は死者・行方不明者

が500人を超える自然災害の発生はありませんでしたが、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災（M7.3、同6437人）によって「（比較的）平穏期」は突然に断ち切れ、2011年には超D級の東日本大震災が発生、その後は毎年のように全国の何処かで大規模な自然災害が発生しています。近年は火山の噴火、地震による火力発電所の運転停止に伴うブラックアウトなど、災害の形態が多様化しているほか、雨の降り方も激しさを増し、今年も6月末から7月初めにかけて九州南部では総雨量が1000mmを超える猛烈な降雨がありました。

次に、残念ながら集中期に入ったのではないとも言われる自然災害にどう向き合って暮らすのが良いのかを考えてみます。災害が多発する現状に素直に向き合い、自然への畏敬と謙虚な姿勢を忘れずに生きることが基本になると思います。九州南部地方の豪雨ではほぼ1年前の西日本豪雨と比較して犠牲者は相当に少なかったのですが、これは避難・警戒情報の高度化や住民の皆さんの意識の高まりなどが複合的に効果を発揮したのではないかと考えています。

地球温暖化などによる環境負荷の増大が自然災害の激化を招いているという意見もあり、確かにそれも大きな要因だろうと思います。自然災害の激甚化や多様化に真摯に向き合い、科学的・技術的知見に立脚したハード・ソフト両面の対策の強化を積み重ねて行くことが肝要です。一方で、江戸幕末期からの自然災害の歴史をみれば、必ずやまた「（比較的）平穏期」が巡ってくるのではないかと考えられます。決して悲観することなく、岩手の先人達がそうしたように皆で支え合って自然災害を乗り越えて行きましょう。